

キリストの聖体 2017.6.18

イエスの肉、イエスの血

ヨハネ6章 51-58節

(そのとき、イエスはユダヤ人たちに言われた。)

「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生きかすためのわたしの肉のことである。」

それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。イエスは言われた。

「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」

説教

わたしはクスリの世話になっています。毎朝、血圧の薬とビタミン剤を1粒ずつ飲んでいきます。でもよく飲むのを忘れているようです。気づけば服用しますが、気づかなければ一回休みになってしまいます。

きょうはキリストの聖体の祝日です。聖体とはパンとワインと解釈されていて、キリスト教の礼拝ではキリストの体として、パン・ワインをいただきます。この儀式を聖体拝領とか聖餐式とかユーカーリストとか宗派によってさまざまな呼び方で呼んでいます。

わたしは10年ほどまえから聖体をいただいているので約10年の聖餐歴があります。たしか血圧降下剤もそのころから処方されているので思い返してみれば同じぐらいの期間になります。きのう思いついたのですが、キリストのからだとしてのパンとワインはわたしたちにとってのビタミン剤、処方箋みたいなもの？ということです。わたしは近所の町医者のところ月に一回行ってクスリを処方してもらっています。それと同じように週に一回教会に行って牧師からキリストのご聖体としてパンとワインをいただく、なんか似ているなあと思いました。また毎朝のクスリを忘れるように、礼拝にいかない週もあるので、これもよく似ているなあと思いました。わたしの場合、医師から説明を受けてクスリを処方してもらっているのですが、実のところ理解して服用しているかといえばそうじゃありません。まあしかたないなあ、実際に血圧たかいしなあと思いながら服薬しています。そこらへんも礼拝と似ていて、牧師のいっていることはなにに似ているんだかわかんないけれど、まあパンをたべないとなんか1週間落ち着かないしなあ、忙しいけれどなんとかやりくりして礼拝にでもいこう、なんか似ているでしょう。

きょうの聖書朗読ではイエスは「わたしが与えるパンとは、世を生きるためのわたしの肉のことだ」といって体と血を食べのみなさいといい、それを聞いたユダヤ人たちが激しい議論をするというようすが記されています。

いまではキリスト教礼拝のなかで儀礼としてパンとワイン儀式があります。かつてユダヤ人が議論したように、いまでも聖餐をめぐるはあれこれ議論もあるようです。つべこべいわずに黙って食べて飲んでいけばいいんじゃないかというのがいまの私の考えです。

ただ、これは嫌だなあと思うのは多くのプロテスタント教会では聖餐は毎週ではなく月に1回ていど（うわさでは年に数回の教会もあるらしい）しかないことです。説教聞きに礼拝に行くというのは正直うっとうしくありませんか。だいたい説教にはあたりハズレがあります。でも聖餐にはそうそうあたりハズレがあ

るわけじゃないでしょ。また牧師がよけいな宣言「洗礼を受けていない人はダメ、聖餐にあずかるのにふさわしくない人はダメ」という意味合いの事をいうことです。これはほんとにイヤで、うんざりします。あと聖書ではワインと書いてあるのにジュースをだすというところもヘンに思います。

自分で礼拝をするようになってイヤに感じるところは改めています。もっとオープンで気持ちのよい礼拝、聖餐をやりたいなあといまも模索しています。

-----